学力を育てる授業とカリキュラム

報告者　東京大学教育学部附属中等教育学校教諭　平　野　和　由

はじめに

中等教育学校を立ち上げて3年目になりました。3年生が最初の中等教育学校の生徒ということになりますけれども，本稿では学校を作り上げていく上で，どういう風にカリキュラムを作っていくか，とりわけ学力を育てていくためのカリキュラムの努力をどういう風にしたかという東大附属の学校作りの話をしたいと思います。学力問題と言いましても，常に学校では存在しているわけです。低学力の生徒が存在して，それをどうするかということは，永遠の課題だと思います。しかし，現在問題になっているのは，それが社会的な問題あるいは教育政策に起因するところで起こっている問題だと思います。私達の立場からすれば，現実の子ども達の学力をどうつけるかということが最大の課題であるわけですから，その中での成果を教育政策にどう提言していくかということになると思いますが，基本的には論争の中になかなか入りづらい立場になります。ですので，これから紹介する私達の取り組みを，どういう風に評価していくかということで見ていただくしかないと思っています。

実際に学習指導要領が改訂されまして，中学校では今年度から実施なんですが，私達の学校は，3年前の立ち上げの時期に，新しい指導要領に対応した形で進めている部分もあります。それで実際にそのことについてどう考えるかということですが，5日制の導入については，個人の意見ですが，時代の流れだから仕方がないと思いますし，総合学習はこの学校では基本的にずっと長くやっていますので，カリキュラムの中での総合学習と教科学習の2本立てというのはある意味では望ましいのではないかと考えています。したがって，必然的に授業時間数が減っていく，それをどういう風に工夫して効果的なものを作っていくかという風に発想せざるを得ない状況にあります。ただここで問題となるのは，授業内容の削減についてということになります。これはいろいろなところで問題になっています。私は社会科を担当していますが，3割削減という数値はそれを当てはめてもかまわないんですが，削減の仕方がかなりひどく，そのまま内容を教えるというのが非常に難しい状態になっていると感じています。社会科の場合は，今ある内容を3割落とせばそれでよいということで済まない内容になっているので，そこを再構成しなければならないということです。教科書は，指導要領では「ミニマムスタンダード」と言いますけれども，教科書の新旧を比較すると唖然とするような内容になっています。それが非常に困るというのが率直な感想です。

学力問題の諸相

さて，学力問題の諸相ということですが，いろいろな立場によって様々な捉え方があるだろうと思って，4つの視点から考えてみました。まず，子ども達の学力問題をどういう風に見るかということですが，表1に，私が担当している高校生の世界史の成績一覧表を1979年から2000年までの20年間にわたってなるべく比較できるような形で操作して整理したものがあります。このようなデータを20年間以上ずっと蓄積することは，なかなか普通の公立学校では難しいのかなと思いますけど，これを見ますと，斜線を引いた部分は平均が70を越えたというところですが，私の実感では学力はむしろ90年代以降ずっと下がっているということはなく，むしろ若干微増しているところがあるように感じています。これはごく限定された私の授業の中の結果で，志水先生の結果はもっと大きなところで取られた数字という違いがありますので，志水先生の結果を間違いだというつもりは全然ありません。ここで言いたいのは，私自身としては，特にこの学校で優れた子を取っているということではないのですが，そういうテストから見た子ども達の様子というのはあまり落ちているとは感じないということです。

しかし，その一方で授業で接する生徒達は問題が変化しているということは大きく感じます。その中で最も強く感じるのは，本を読まない生徒が多く，授業が成立しない，教科書を読ませると嫌がる，読ませても声が小さいということです。それから，学習に対しても「1」を取ったらまずいのですが，「2」なら進級できるので，「2」でいいというように，意欲がなかなかもてない子が少し増えているなという気がします。また，担任などしていますと，テスト前の学習計画を立てさせるんですが，そのようなプランニングが出来ない，時間の自己管理，自

表1　1979年～2000年世界史成績一覧表

(100満点　学年平均)

	前期中間	前期末	後期中間	学年末	学年区分
1979	60.7	56.6	65.6	70.0	II ①
1980	62.2	67.4	58.9	65.9	II ①
1981	67.7	69.8	62.3	67.4	I ②
1982	56.9	57.3	61.9		III ①
1983	63.5		69.7	60.2	I ②
1984	56.9		59.6	63.6	I ②
1985	72.4	71.5	73.0	69.5	I ②
1986	66.7	63.1	68.3	59.5	II ②
1987	66.3	69.0	65.0	59.2	II ②
1988	63.4	59.3	59.5	76.0	II ②
1989	55.3	66.1	68.5	65.8	II ②
1990	74.0	46.6	74.4	73.0	II ②
1991	73.1	72.2	76.7	76.3	II ②
1992	65.9	80.1	76.4	63.1	II ②
1993	74.4	72.2	71.4	76.2	II ②
1994	75.5	70.1	81.0	70.9	II ③
1995	60.3	70.0	71.2	72.2	II ③
1996	63.6	65.9	72.4	75.4	II ③
1997	70.4	69.6	78.1	61.8	II ③
1998	71.2	74.8	74.9	70.5	II ③
1999	77.3	77.7	59.0		III ③
2000	66.9	55.6	69.6	64.0	5 ④

＜区分＞
① II年古代～，III年ルネサンス～
② II年ルネサンス～，III年帝国主義～
③ I年ルネサンス～，II年帝国主義～
④ 5年19C～，6年古代～

分自身の学習方法がわかっていない，そういう子が増えているなという気がします。

また，別の視点から見た学力問題としては，学校にとっての学力問題ということが挙げられます。附属学校は大学の附属ですので，大学が独立行政法人化されると，それに伴って国立大学附属ではなくなるわけです。当然そうなると，これははっきりどういう風になるかわからないんですけれども，学校選択の競争の中に当然巻き込まれていく。そうすると，附属学校ではどういう学力を持った生徒を育てているのかということが，競争原理の中に巻き込まれていくことになり，どういう学力を育てるかということが学校競争の中で重要な意味を持ってくるわけです。つまり，変な言い方ですけれども，「商人」としてどういう学力を持った生徒を作るかということを強いられざるを得なくなっていくということです。そして，そのための「商品開発」をしていかなければならないというようなことになる，という意味でもすごく深刻な問題となってくるということです。

学力を育てるカリキュラム編成上の工夫――「東大附属の学校づくり」

次に，附属学校でどういうカリキュラムを作っているかということについてお話します。図1に，6年間で学習がどのように進んでいくかということをまとめました。右の一番端の四角は，6年を2年ずつにわけてそれぞれ「基礎」「充実」「発展」ということで目標を立てていくということを表しています。また，2年ずつ分けて，その中で教科学習と総合学習が2本立てに進んでいきます。1・2年では「総合学習」，3・4年では「課題別学習」，5・6年では「卒業研究」ということで，教科学習と総合学習を連携させていくということで発展して，最終的には，1番上にあります「未来にひらく自己確立」ということを目標にして組み立てられています。授業形態もそれに伴って，1・2年では「共通履修」，「小人数，TT」，3・4年では「必修科目と選択科目」，「小人数，TT」，そして「選択科目中心」は5・6年でということで作られています。

それを横断的に見たのが図2です。目指すべき力として「5つの力」ということを主張しているのですが，「5つの力」というのは，「ことば」「情報」「身体・表現」「関係」「論理」を指します。それぞれの力をどのように付けていくかについては，「総合学習」という場面と「教科学習」という場面で作っていくということになっています。「総合学習」というのは1年，2年，3・4年，5・6年それぞれが右の方に紹介しておいたようなプログラムになっています。また，「5つの力」と基礎学力をどう考えるかということについてですが，「5つの力」は最初はいろんな教科，特定の教科で育成すべき力という風に考えられていました。しかし，現在ではいろいろな場面で可能な限り培っていく，総合学習だけではなくて，教科でも付けていくということになっています。また，「5つの力」というのは，最初は基礎学力を付ける上での基礎の基礎ということで設定したのですが，学年の最初の学習だけではなくて，進行していく過程でもその力はさらに伸ばしていく，知の総合，学習の総合として「未来にひらく自己確立」という形で作っています。

もう1つの取り組みとしては，教科自身の再編，教科の連携をいくつかの教科で進めていくということがあり

東大附属カリキュラムの構造

「未来にひらく自己の確立」

図１（円錐モデル）

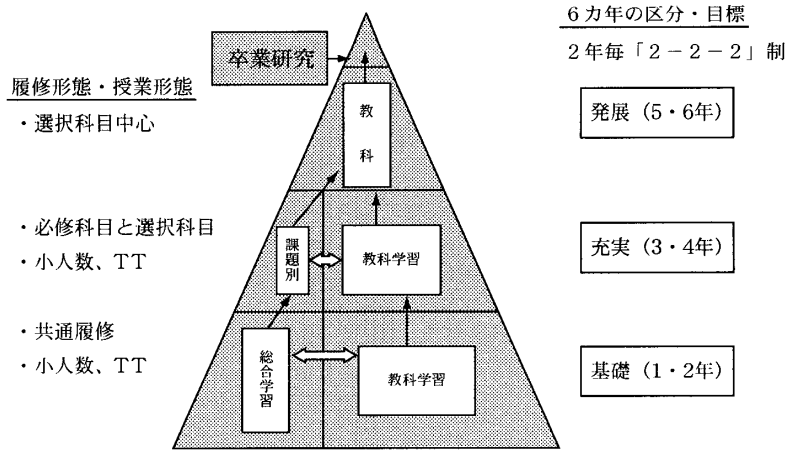
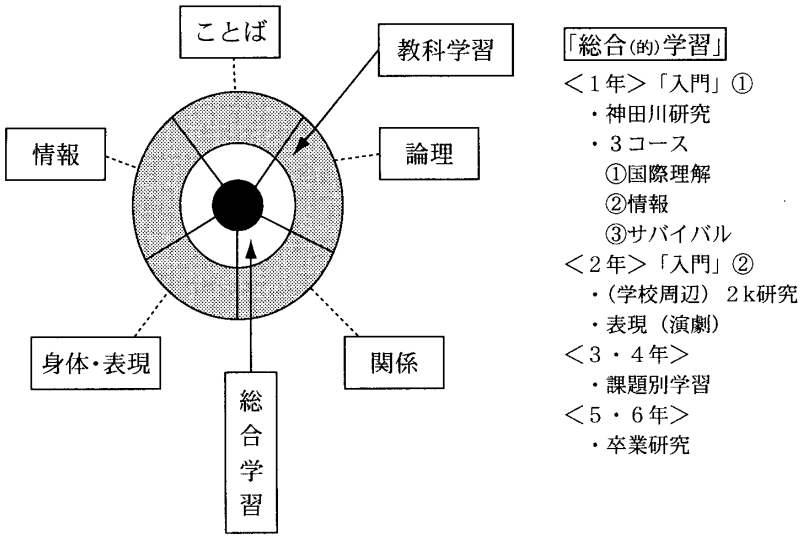


図２（横断モデル）

「５つの力」と総合（的）学習・教科学習



ます。これは実際に授業時間が少ない，総合学習と関係するということもあります。また，上で横断的な話として触れましたが，教科と総合学習の関係についての取り組みも検討しています。現実には1年生がやっているいくつかの総合学習の中と実際に今教科との連携を考えていくというカリキュラムです。それから，クラスの人数をどうしても40人を切れないために，小人数とか習熟とか卒業研究は個別研究でやっているということで進めています。また，布忍小学校の診断テストのような形で，カリキュラムがどういう結果になっているかということをこれからまとめていきたいという風に考えているところです。

本論文は，2002年度公開シンポジウム（2002年12月７日）で報告されたものである。